

平成24、25年度 調査研究報告書

(1年次 中間報告)

特別支援教育の視点を生かした授業づくり



長崎県教育センター 特別支援教育研修課

目 次

I	研究主題	4
II	主題設定の理由	4
III	研究の目的（1年次）	5
IV	研究の内容	5
V	研究の方法（1年次）	6
VI	研究の経過（1年次）	7
VII	研究の実際	8
1	「分かりやすい授業」の定義	8
2	特別支援教育の視点から見た「分かりやすい授業」	10
◆	各教科の事例の見方について	10
	【事例1：国語科】	12
	【事例2：社会科】	16
	【事例3：数学科】	20
	【事例4：理科】	26
	【事例5：外国語科（英語）】	32
VIII	まとめ	36
1	研究1年次の成果	36
	（1）「分かりやすい授業」の要件	36
	（2）次年度の研究に向けて	40
	終わりに	41
	資料・参考文献等	41

I 研究主題

特別支援教育の視点を生かした授業づくり

II 主題設定の理由

1 特別支援教育を取り巻く状況から

平成24年7月、中央教育審議会初等中等教育分科会特別支援教育の在り方に関する特別委員会から「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)」が出された。同報告では、今後、誰もが個性を尊重し支え合い、多様な在り方を認め合える全員参加型の社会である「共生社会」の実現を目指すこととし、そのためには「インクルーシブ教育システムの構築」が重要であると述べられている。また、国の動向を踏まえつつ、本県において策定された「長崎県特別支援教育推進基本計画第1次実施計画」の基本方針においても、全ての学校(園)において特別支援教育を推進するための一層の取組が期待されている。

このように、インクルーシブ教育システムの構築には特別支援教育の更なる充実が必要不可欠であり、その充実に向けて、教員の意識改革と、より高い専門性の向上が求められている。このことは、授業と学級経営、双方の力量を向上させていくなかで実現されるものであるが、最も大切なことは、特別な教育的ニーズがある児童生徒だけでなく、全ての児童生徒の教育的ニーズに応じた指導・支援の充実を図ることを前提とした授業や学級経営を目指すことである。全ての児童生徒の実態を適切に把握し、児童生徒の個性や人格を尊重するとともに、一人一人の教育的ニーズに応じたきめ細かな指導・支援を行おうとする教師の姿勢が、児童生徒同士の学び合いによる相互理解等に好ましい効果をもたらす。そして、その積み重ねが共生社会の形成に向けた社会全体の動きに連動していくものとする。

2 学校現場のニーズ及び喫緊の課題から

このような背景のなか、通常の学級において、特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりが注目されている。特別支援教育の視点を取り入れた授業が、全ての児童生徒にとって「分かりやすい授業」となり、児童生徒一人一人の学びを支え、深めるという考え方のもとに研究が進められている。特別な教育的ニーズの必要な児童生徒をはじめ、全ての児童生徒の教育的ニーズに応えるためには、一斉授業の中で適切な指導・支援を意図的・計画的・系統的に盛り込んだ授業づくりを行うことが重要である。これは、特別な支援を必要としている児童生徒だけでなく、全ての児童生徒の学力向上につながるものと言われている。本来、幅広い学力層があることを前提として、また、多様な教育的ニーズを抱える通常の学級においては、「個の視点」と「全体の視点」の双方を踏まえた上で、教科教育が行われる必要がある。

しかし、全国的に見ても、特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりは、その多くが小学校の実践であり、中学校における実践やその効果を検証した研究は少ないのが現状である。理由として、中学校が教科担任制で毎時間教員が変わること、そのために各教科を通じた横断的な指導方法を蓄積するという視点が共有されにくいこと等が推測される。小学校における実践と同様の取組が中学校においても積極的に展開され、その成果が学校内外で共有されることが期待されることである。

3 これまでの調査研究の成果の活用並びに教科教育の知見の融合から

そこで、本調査研究では、中学校の教科指導に焦点を当て、学習方法に関連する認知様式や障害特性といった特別支援教育からの知見と、学習内容に関する教科教育からの知見とを融合させた授業実践の成果の分析等を通して、「分かりやすい授業づくり」の要件について明らかにしたい。

特別支援教育の知見としては、当教育センターにおける過去の調査研究の成果物や刊行物「通常学級の特別な教育的支援を必要とする児童生徒が生き生きと活動できる学級経営・指導の在り方<平成19年度>」、「すぐに使える校内ヒント集<平成20年度>」、「高等学校における特別支援教育ハンドブック基礎編<平成21年度>、実践編<平成23年度>」等があるので、それらを活用し、特別な支援を必要とする児童生徒への個々の指導・支援を考える中で大切にしてきた視点を一斉指導にどのような形で生かせるか、その具体例を明らかにしたい。

また、教科教育の知見としては、教育センターの特徴である様々な校種の集合組織体であるという利点を最大限に生かし、研究過程全般にわたって義務教育研修課等との横断的研究を行うなかで、互いの知見や研究実績等の情報交換を図りながら、全ての児童生徒が「分かる・できる」という実感を持つことができる授業の創造につなげたい。

Ⅲ 研究の目的（1年次）

本調査研究は、特別支援教育の視点を生かして、中学校における「分かりやすい授業づくり」の具体的な要件や方策等について考察し、提言、発信することを目的とする。

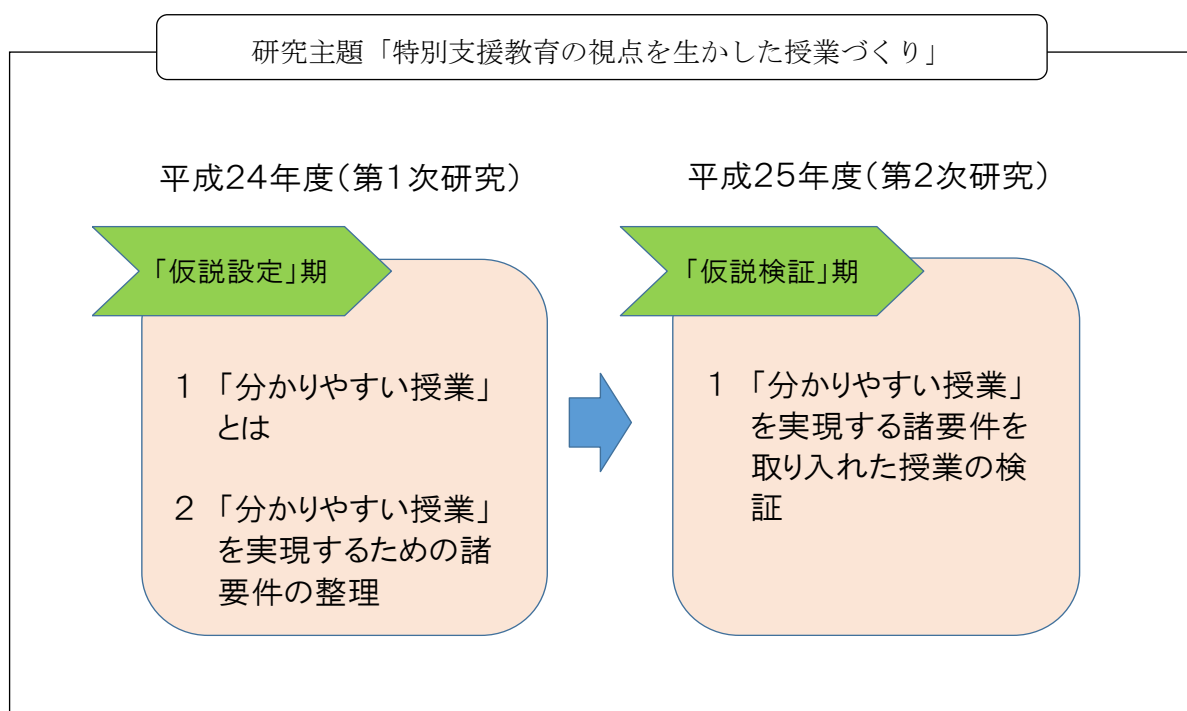
Ⅳ 研究の内容

本調査研究は、平成24年度、25年度の2か年の研究とする。1年次の研究は2か年研究の「仮説設定」期とし、2年次の研究は「仮説検証」期として位置付ける。

1年次の研究は主に二つの内容を柱に構成する。

一つは「分かりやすい授業」とはどのような授業かということを確認にすることである。もう一つは、「分かりやすい授業」を実現するための諸要件を整理することである。

以下に研究の全体像（構想）を模式的に示す。



V 研究の方法（1年次）

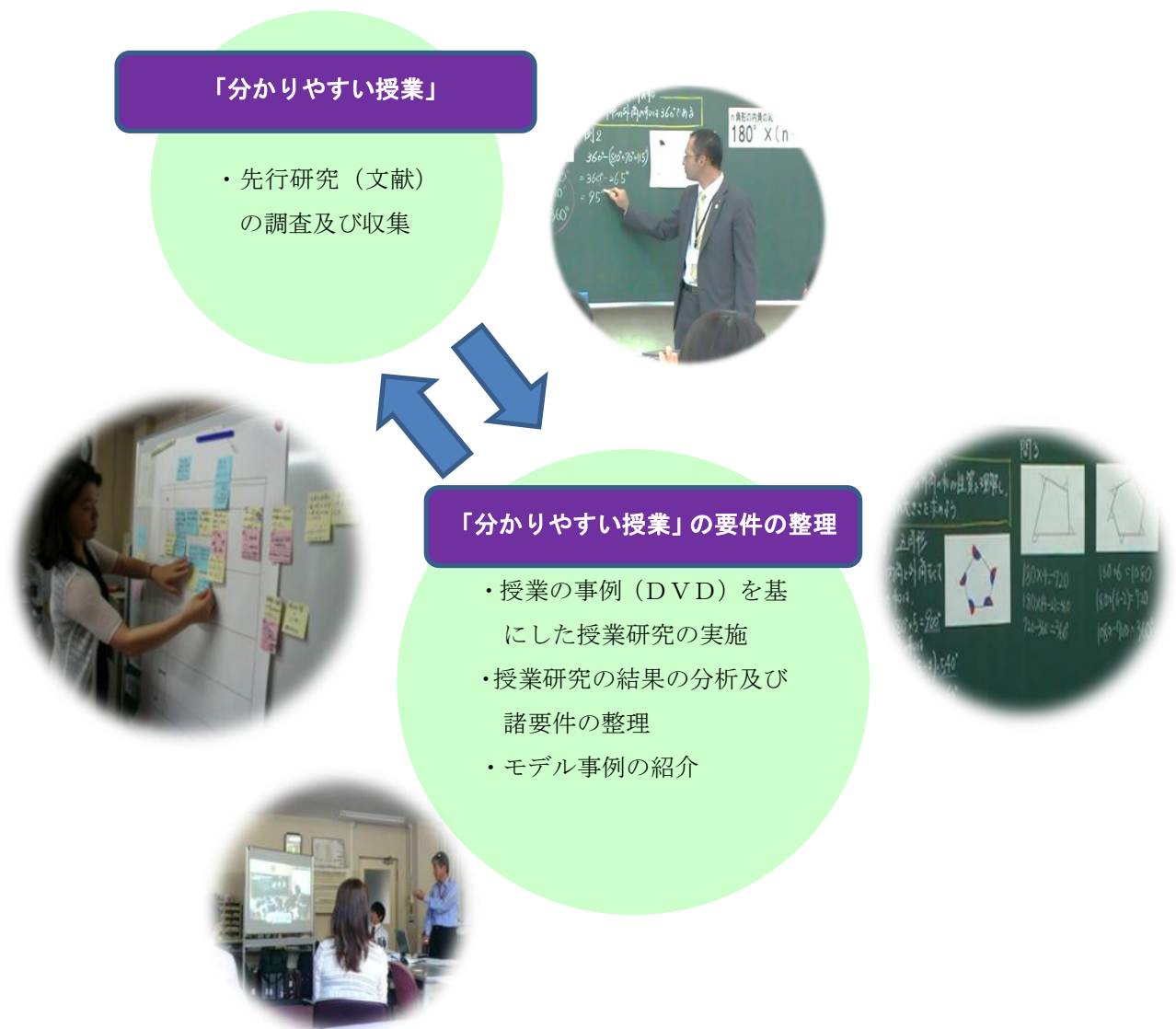
特別支援教育の視点を取り入れた「分かりやすい授業」とはどのような授業を指すか、このことについて、以下の要領で整理する。

- 1 先行研究（文献）の調査及び収集。
- 2 県内の中学校において実践された授業（※）を事例として挙げ、義務教育研修課及び企画課の教科担当指導主事及び研修員との協働による授業研究を実施し、その授業研究の結果を基に「分かりやすい授業」の要件を整理する。

※1年次の研究では、中学校の「国語科」、「社会科」、「数学科」、「理科」、「外国語科（英語）」の5教科を研究対象の教科とした。

※「国語科」、「社会科」、「数学科」、「理科」の授業研究については、当教育センターの研修員（平成23年度当時）が県内の中学校で出前講座の一環として実施した所員授業を対象とした。「外国語（英語）」は、県内の中学校から提供された授業VTRを基に授業研究を実施した。

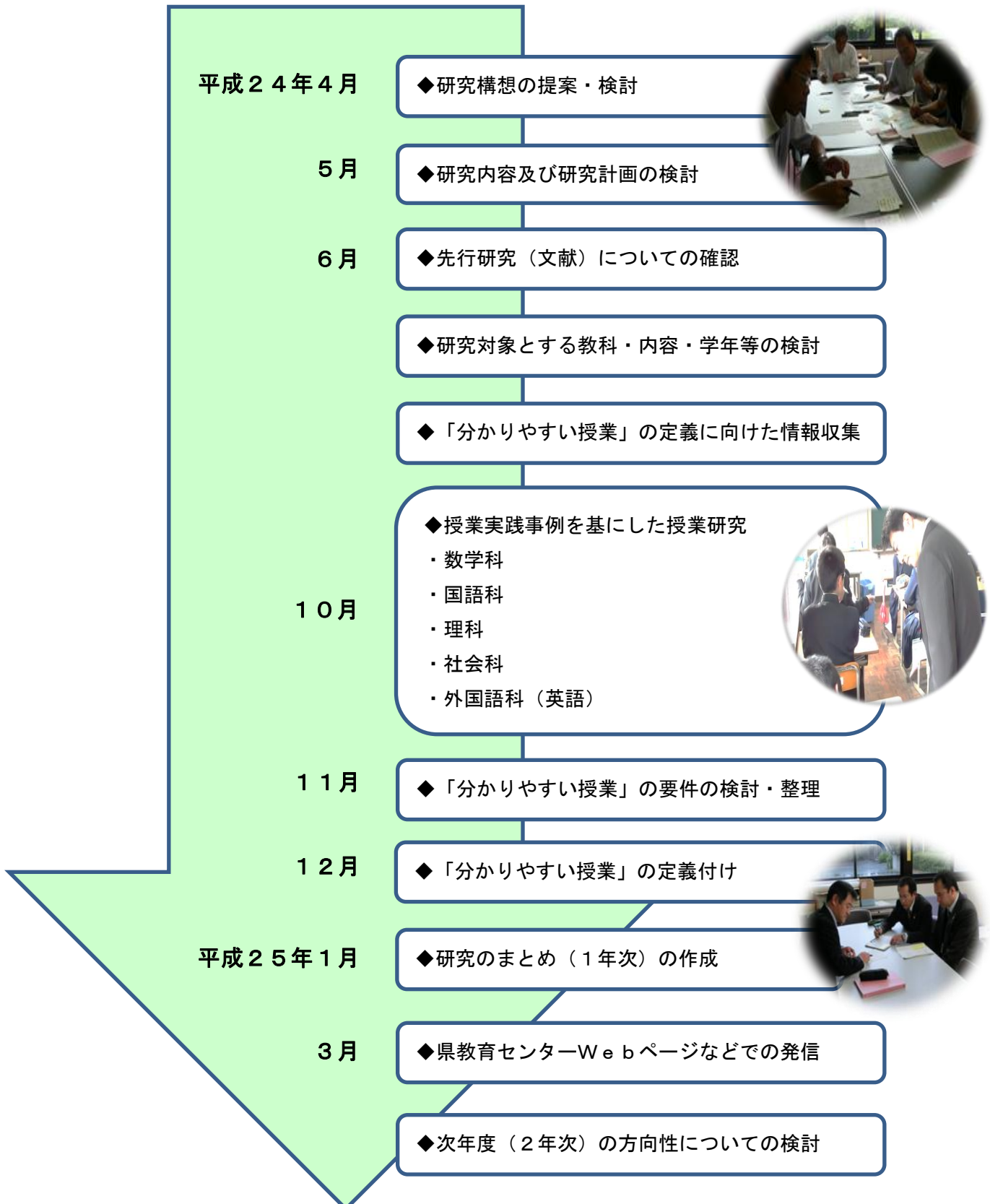
※各授業は、平成23年4月から平成24年3月の期間に実施されたものである。なお、各授業では、平成20年に告示された中学校学習指導要領に準拠した教科書を使用している。



VI 研究の経過（1年次）

本年度は、10回の調査研究会を実施した。特別支援教育研修課内では、年間を通じて「分かりやすい授業」の定義や要件等について協議した。また、授業研究会については、義務教育研修課並びに企画課の教科担当指導主事及び研修員との協働により5回実施した。

以下に1年次の研究の経過を示す。



VII 研究の実際

1 「分かりやすい授業」の定義

本研究で考える「分かりやすい授業」とは、従来から通常の学級で大切にされてきた各教科の目標や内容を習得しやすくするための手立てと、生徒のつまずきの背景にある認知様式や障害特性等を踏まえた特別支援教育の視点が融合された授業である。しかし、ここでの「融合」とは、通常の学級に在籍する発達障害のある生徒に必要な支援や配慮を一方的に取り込もうとするものではない。実は、教科の特性等を踏まえ、十分な教材研究に裏打ちされた優れた授業の手立て等には、既に特別支援教育の視点が数多く含まれていると考えられる。

したがって、「分かりやすい授業」を実践する上で大切なことは、教科指導の専門性やノウハウのなかに、特別支援教育の視点が内包されていることを理解してもらうことである。具体的には、通常の学級で実践されてきた各教科の目標や内容を習得しやすくするための手立ては、同時に認知様式や障害特性等を踏まえた手立てでもあるという再確認を行うことと考える。

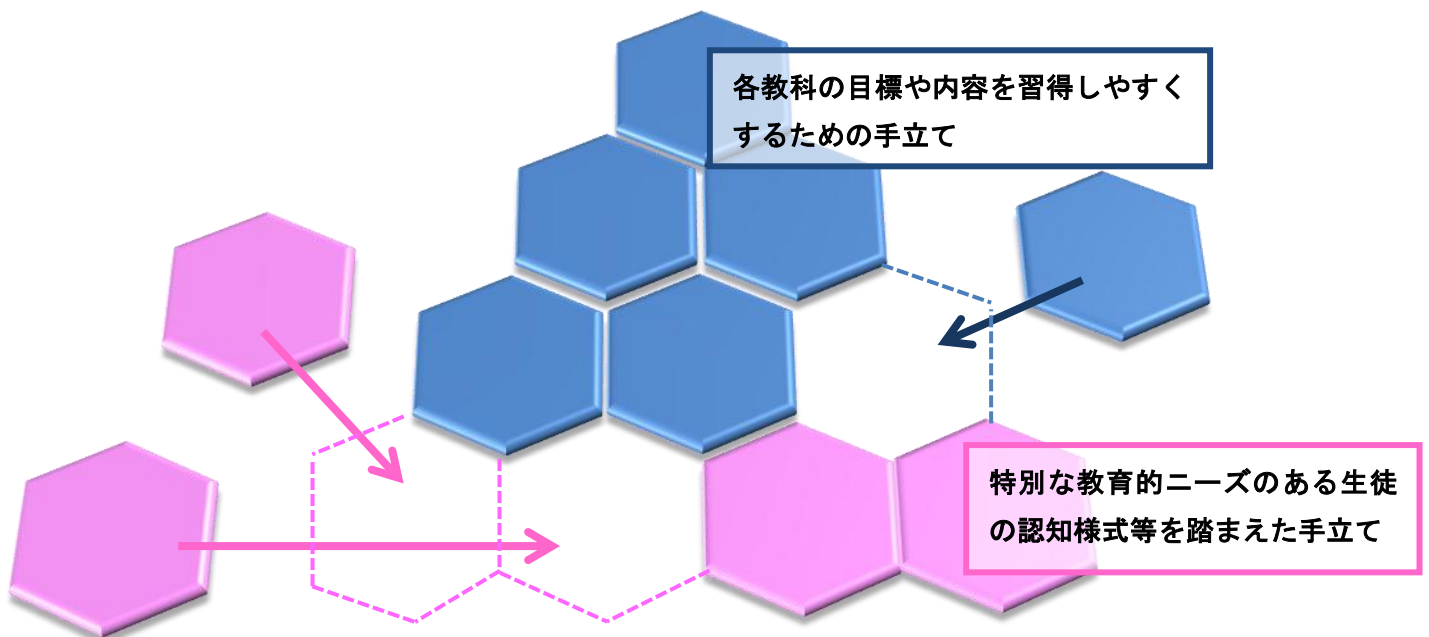
教科教育と特別支援教育双方で培ってきた指導・支援のノウハウや知見等を互いに生かし合うなかで、「分かりやすい授業」が実現されていくものとする。

以上のことから、本研究における「分かりやすい授業」については、次のように定義した。

「分かりやすい授業」とは

通常の学級で培ってきた「全ての生徒に分かりやすい授業」の要素と、特別な教育的ニーズのある生徒の認知様式等を踏まえた指導・支援の要素が一体化された授業である。そのような授業づくりをめざすなかで、互いの要素が精錬され、生徒の学習意欲がさらに喚起されるとともに、生徒に「分かった」「できた」という達成感を持たせることができる授業である。

「分かりやすい授業」





2 特別支援教育の視点から見た「分かりやすい授業」

◆ 各教科の事例の見方について

各教科の事例は、学習指導案をベースに、実際に使用した板書・ワークシート・教材等を掲載することにより、「分かりやすい授業」づくりにつながる学習活動の進め方や指導のポイント、分かりやすい板書のイメージ、効果的な教材の在り方等が一目で分かるような構成にした。

また、授業者が意図した「分かりやすい授業」のポイントが効果的であった理由を、特別支援教育の視点から意味付けし、解説を行った。

【事例5 外国語科(英語)】

1 単元名

「Lesson 5 My friends in Okinawa」(三省堂:NEW CROWN ENGLISH SERIES New Edition 1)

2 単元の目標(ねらい)

- 本文やスキットを暗唱し、音声の特徴を生かし、内容が良く表現されるように発表しようとする。
- 3人称の代名詞主格や目的格の用法を理解し、身のまわりの人を紹介したり、その人について尋ね合ったりすることができる。

3 本時案

(1) 本時の目標

3人称の代名詞主格(he, she)の用法を理解し、有名人についての紹介文を書くことができる。

(2) 学習過程

過程	学習活動	指導上の留意点	備考
始業前	①②	○本時の学習に必要な内容をあらかじめ板書しておく	
導入	1 簡単な読み書きのトレーニングを行う ① ②	○ペアで活動させる。各ペアの活動の様子を把握し、適宜アドバイスを行う(☆8)。 ○重要なアクセント・発音に気を付けながら、リズムよく練習させる。	○ワークシート
展開	2 教師のスピーチを聞く ④ 3 第三者を紹介するときの用法を知り、練習する。	○自分自身の家族のことを話題としたスピーチを行う。 ○表情豊かに、生徒の反応を見ながら行う。 ○教師のスピーチを振り返りながら、3人称の代名詞主格の用法を知らせる。	○写真

単語は「音(読み)→形(文字)→意味」を関連させて発音したり書いたりすると、記憶(理解)しやすくなる。

教師がスピーチしたことで、「音」を聞き取ることが苦手な生徒も聞き取りやすいと思われる。
【参考】
CD等の機械音は、「聞く」ことが苦手な生徒の場合、聞き取りにくいことがあるため配慮が必要。

表情やボディアクションを付けることで、スピーチの内容を推測しやすくなり、内容理解につながる。

「he」「she」の音を繰り返し聞いたり、生徒自身が発音したりすることで、「聞く」ことが苦手な生徒は、音の違いに気が付きやすくなる。



全教科に共通する「分かりやすい授業」のポイント

- ・目標やねらいの持たせ方、授業の構成、指示や説明の方法、学習のルール、板書やノートの取らせ方等、全教科に共通する「分かりやすい授業」の工夫については、☆で示した。
- ・☆横の数字は、『全教科に共通する「分かりやすい授業」の要件』(「VIIIまとめ」表2)に示すカテゴリ番号と対応している。






当該教科の特徴的な指導の工夫・手立てに関する特別支援教育の視点からの解説

- ・認知様式や障害特性等を踏まえた特別支援教育の視点から、計画していた指導や手立てが効果的であった理由・根拠について意味付けをした。



板書、ワークシート、教材等の工夫

- ・学習過程において、板書、ワークシート、教材等が工夫されている箇所を    で示した。
- ・板書の仕方や、ワークシート、教材等の活用の意図や工夫については、特別支援教育の視点から解説した(解説については、「4. 板書・ワークシート・板書等」で行った)。

4 板書・ワークシート・教材等

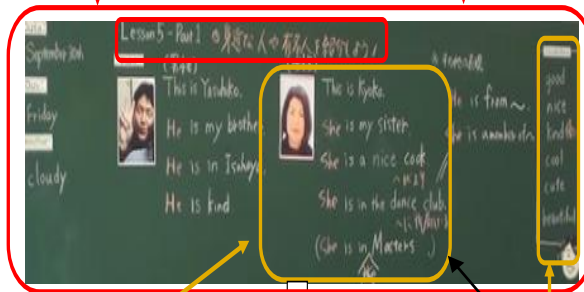
(1) 板書



① 板書が、左から「今日の情報(日付等)」「課題解決の手助けとなる視覚資料及び例文」「本時のポイントとなる単語」というように構造化されており、授業の流れや必要な情報が分かりやすい。



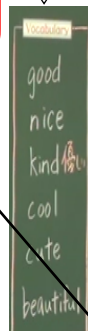
② 本時の単元、課題(point)が示してあることで、この時間に何を学習するのが分かりやすい。



④ 写真を活用したり、「男性」「女性」を対比させて示したりすることにより、3人称代名詞主格の理解が促される。



③ 授業でポイントになる単語が、板書されているのは、理解語が少ない生徒にとって有効であると思われる。(導入の単語学習でも取り入れている。「(3)のワークシート」参照。)



全教科に共通する板書、ワークシート、教材等の工夫、手立て

・全教科に共通した板書・ワークシート・教材等の工夫や手立てと考えられる箇所を で示し、その理由や根拠について特別支援教育の視点から に解説した。

当該教科に特徴的な板書、ワークシート、教材等の工夫・手立て

・板書、ワークシート、教材等の工夫や手立て等の中でも、当該教科に特徴的なものを で示し、その理由や根拠について特別支援教育の視点から に解説した。

【事例 1 国語科（対象：第 2 学年）】

1 単元名

「2年2組版『枕草子』風エッセイ集をつくろう」（三省堂 現代の国語2）

2 単元の目標（ねらい）

- 清少納言のものの見方やとらえ方に関心を持ち、自分のものの見方や考え方を広げたり描写の仕方を工夫したりしてエッセイを書こうとする。＜関心・意欲・態度＞
- 事実や事柄、意見や心情が相手に効果的に伝わるように、説明や具体例を加えたり、描写を工夫したりして書くことができる。＜書くこと ウ＞
- 古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像することができる。＜伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項ア（イ）＞

3 本時案

（1）題材名

「枕草子」

（2）本時の目標



日常生活の中で感じた「うつくしきもの」または、「にくきもの」「うらやましげなるもの」を、清少納言の「うつくしきもの」の描写の特徴をもとにしてエッセイを書くこと。

（3）学習過程

予習…「うつくしきもの」「にくきもの」「うらやましげなるもの」から一つ選び、五つ以上考えてくる。

過程	学習活動	指導上の留意点	備考
教 え る	1 本時の目標をつかむ。 ①		
	2 「うつくしきもの」を音読する。(追い読み・一斉読み 本文と訳の交互読み) 5分	○「うつくしきもの」の書き方の特徴について考えながら音読させる。	
	3 四つの「うつくしきもの」の並び順や、描写の特徴をつかむ。5分 ②	○以下の特徴を教える。 ・清少納言独自のものの見方や考え方が表れていること。 ・物事を端的に表現しているものと、ある場面を限定的に捉え、読み手に分かりやすいように、5W1Hなどを用いてより詳しく描写されているものがあること。 ※特に後半の二つは、ただ、	

「5W1Hの視点」が文章内に多く述べられているものほど、「詳しいもの」であることを伝えることで、「端的なもの」との違いを明確にしている。

		「小さい子ども・もの」が「うつくし」と言っているのではなく、【小さい〇〇が～しているのが「うつくし】という風に、あるもののある場面を限定的にとらえ、詳しく描写している。そこが、清少納言のもの見方・とらえ方であり、「うつくしきもの」の描写の特徴の一つであることをおさえる。	○モデル（黒板添付用）
理解の確認	4 教師作成モデルエッセイを読み、清少納言の「うつくしきもの」との並び順や描写の特徴の共通点をつかみ、自分のエッセイの参考にする。  ③	○モデルは「 <u>うつくしきもの</u> 」の描写の特徴を捉え、 <u>現代の子どもたちの感覚に近く共感しやすいもので、独自のものの見方や考え方が表れたものを示す。</u>	○ワークシート
理解の深化 考えさせる	5 「うつくしきもの」「にくきもの」「うらやましげなるもの」から一つを選び、「うつくしきもの」の書き方をもとにして日常生活の中で感じたものを具体的に描写したエッセイを書く。(個人) 15分  ① 6 各自のエッセイをグループで読み合い、付箋を使って相互評価する。(4人グループ) 15分	○家庭学習の付箋とワークシートを用いてより具体的に、第三者が読んで理解できるように詳しく描写させる。 ○並べる順番は、端的に言い切ったものから、詳しく描写されたものへとなるように助言する。 相互評価の視点 ・ <u>書き手のものの見方や考え方が、読み手に伝わるように書いてあるかどうか。どういところが伝わりにくいか。どういうことを書き加えたり、書き直したりすれば伝わりやすいなど。</u>	
定着の診断	7 授業の振り返りと次時の学習を知る。		

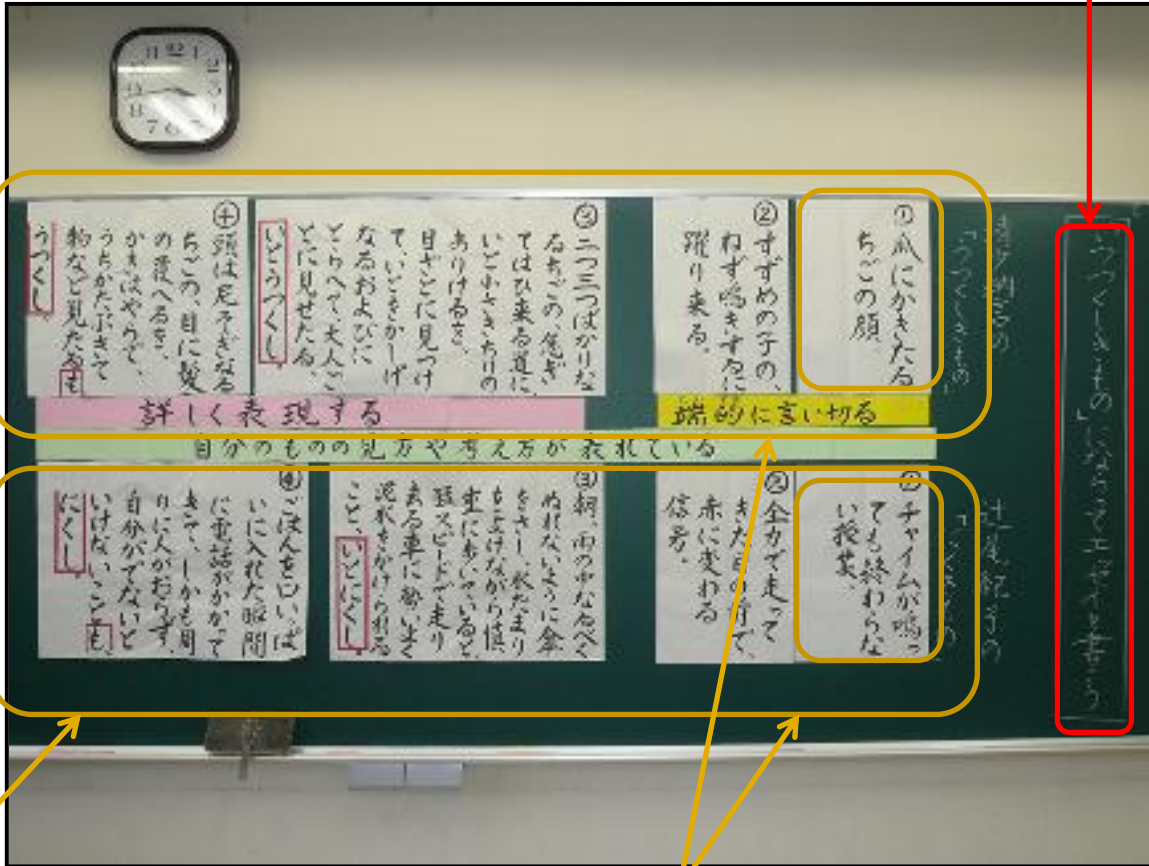
教師作成モデルを示すことで、生徒が「どういものを作ればよいのか」をイメージしやすくなり、見通しをもって授業に臨むことができると思われる。また、抽象的な言葉をイメージすることが難しい生徒にとって、教師作成モデルに身近なもの、事実、具体物を示すことで、理解しやすくなる。
(例 チャイム、信号)

様々な視点から物事を捉えたり、考えたりすることが苦手な生徒の表現は、平易かつ単純な描写になりがちである。グループ活動で他者のものの見方や考え方に触れることで、自分が作ったエッセイとの比較ができ、新たな視点に気付いたり、より詳しく描写しようとする意欲を持ったりすることができる。

4 板書・ワークシート・教材等

(1) 板書

①
本時の目標が示してあることで、時間内に何をすれば良いのかが分かりやすい。



②
黒板の上段は古典文、下段は教師作成モデル文に分けて資料を添付している。また、上段下段ともに、「端的なもの」から「詳しいもの」を右から左に順に並べている。このように黒板を構造化して使用することが、見やすさや活動の要点の理解のしやすさにつながっている。

③
本文（うつくしきもの）と教師作成モデルとを視覚的に対比させることで、並び順（構造）や描写の特徴の共通点に気付きやすくなる。

(2) ワークシート

資料11 エッセイを書こう

<p>④ うつくし・にくし・うらやましげなり</p> <p>③</p> <p>②</p> <p>①</p>	<p>宿題で書いてきた付せんをはるところ</p> <p>【版】「つくしきもの・にくきもの・うらやましげなるもの」(どれか一つに○をつけよう)</p> <p>うつくしきもの・にくきもの・うらやましげなるもの</p>
<p>④ うつくし・にくし・うらやましげなり</p> <p>③</p> <p>②</p> <p>①</p>	<p>付せんをはるところ</p> <p>【版】「つくしきもの・にくきもの・うらやましげなるもの」(推し)</p> <p>こう後 うつくしきもの・にくきもの・うらやましげなるもの</p>

「二年」(組版『枕草子』風エッセイ集をつくる)ワークシート

① 「端的に書く」、「詳しく書く」ことについて、その文章量や意味が分かりにくい生徒は、記述欄の幅を徐々に増やしていくことで、「端的に書く」、「詳しく書く」ことの意味を視覚的な物差しでイメージできるようにしている。

① 上段にある友達の意見が書かれた付箋を見てエッセイを推敲した後、下段に書き直すことができるようにしている。

【事例2 社会科（対象：第2学年）】

1 単元名

「世界恐慌と日本の中国侵略」（東京書籍：新編 新しい社会 歴史）

2 単元の目標（ねらい）

世界恐慌による経済の混乱を乗りきるために行った各国の対策により対立が深刻化し、この流れが第2次世界大戦を招いた遠因であることに気づかせるとともに、我が国においては経済の混乱による社会不安の広がりの中で、政党政治が行き詰まりを見せ、軍部が台頭して大陸での勢力を拡張し、戦争に至るまでの経過を理解させる。

3 本時案




(1) 題材名

「世界恐慌とブロック経済」

(2) 本時の目標





世界恐慌の概要と欧米諸国（米・英・仏・ソ）の政策について理解することができる。

(3) 学習過程

過程	学習活動	指導上の留意点	備考
教 え る	1 「パンの配給を待つ人々」の写真を見せて、アメリカの世界恐慌の前後の様子をつかむ。  ①	○看板と行列の対比に注目させ、 <u>アメリカの世界恐慌前後のイメージを持たせる。</u>	○写真 ○ワークシート ○教科書資料 ・「ブレッドライン」写真
	2 世界恐慌の概要について理解する。 ・いつ（きっかけ） ・どこで ・状況 ・原因  ①  ①	○生徒と対話をしながら世界恐慌の概略を説明する。 ○予想ができなかった出来事である <u>ことに触れ、倒産や失業者の増加など深刻な問題であったことに気付かせる。</u> ○資本主義経済における「生産過剰」が、原因の一つであったこと程度にとどめておく。 ○世界経済の中心であったアメリカで生じたため世界中に広がったことに気付かせる。	・アメリカの失業者数の推移グラフ ○PT教材 ・ヨーロッパとアメリカの関連図 ・アメリカ以外の国の失業者数の推移グラフ
	3 本時の学習のめあてを確認する。		

「ブレッドライン」を象徴する写真を示し、「世界恐慌前の生活水準を意味する看板の文字」と「行列をつくる人々の貧しい姿」に注目させ、それらを対比させることで、抽象的な事柄を想像することが苦手な生徒が、世界恐慌前後の情勢をイメージしやすくなる。

「ブレッドライン」の写真とグラフとを提示したことで、抽象的な事柄を想像することが苦手な生徒が、写真によって失業者の数の多さを具体的に確かめるとともに、グラフでその急増した様子を視覚的に捉えやすくなる。

		<p>世界恐慌に対して、欧米諸国はどのような政策を行ったのだろうか。</p> <p>4 世界恐慌に対する各国（アメリカ、イギリス・フランス、ソ連）の政策について調べる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アメリカ：ニューディール政策 ・イギリス、フランス：ブロック経済 ・ソ連：五か年計画  ②  ②	<p>○4つの国の位置を最初に確認し、ソ連は社会主義であったため、恐慌の影響を受けなかったことを説明する。</p>	<p>○ワークシート</p> <p>○教科書資料</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「主な国の鉱工業生産」 <p>○教科書資料</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ルーズベルト
理解の確認	<p>5 それぞれの政策についてペアで政策名や中心人物、内容等を確認する。</p>  ②③④⑤	<p>○それぞれの政策をペアで確認し、<u>分からないときは教え合いをするように促す。</u></p> <p>○それぞれの政策がなぜ不景気の脱出策になるのかを適宜補足する。</p> <p>○机間指導や代表生徒の発表を通して、理解状況を確認する。</p>	<p>大統領</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ダムの写真 ・ソ連の五か年計画のポスター <p>○教科書資料</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ブロック経 	
理解の深化	<p>6 イタリア、ドイツ、日本がブロック経済に反発した理由について考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分たちの商品に高い関税をかけて売れなくなるから。 ・自分たちの国は植民地が少なく、ブロック経済ができないから。  ③	<p>○ブロック経済が与えた影響を考えさせることで、欧米諸国の政策の理解の深化を図る（☆4）。</p> <p>○支援が必要な生徒を中心に個別指導にあたる。</p> <p>○教科書の地図から<u>米・英・仏・ソは経済圏が広いことに気づかせ、開発可能な自国領土や植民地を所有している国、いわゆる「持てる国」の政策であることをおさえる。</u></p> <p>○『「持たざる国」はどんな政策を取ったか』と投げかけ、次時につなげる。</p>	<p>経済、世界地図</p> <p>○ワークシート</p>	
考えさせる	<p>7 学習の振り返りを行う。</p>	<p>○本時の学習で分かったこと、良く分からなかったこと、感想などをワークシートに記述させる。</p>		
定着の診断				

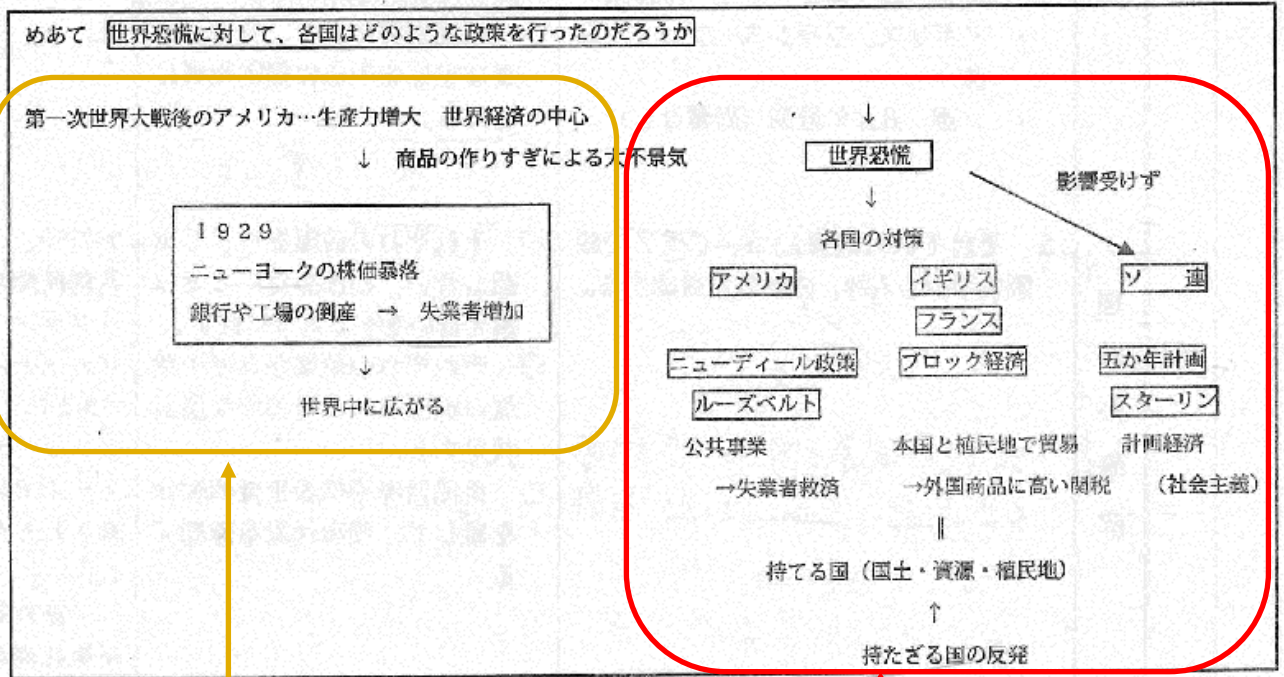
自分の視点だけで理解している生徒には、他者の視点が入ることで、「気付き」の幅が広がる。また、物事を一面的にしか捉えられない生徒の場合、説明の際に着眼すべき政策のキーワードを意図的に示すことで、相手に分かりやすく表現するための手掛かり等につながる。

政策に関わる主要人物や代表的な公共事業の写真を同時に提示することで、政策と主要人物との結びつきを強め、ワンセットで覚えることができるようになる。

世界地図に各国の自国領土と植民地を色分けして示すことで、各国の位置関係や所有する国土面積の広さを捉えやすくなる。

4 板書・ワークシート・教材等

(1) 板書



①
それぞれの事象間の関連を矢印で示すことで、各事象の関連を推察しやすくなる。



②
行間を広くとり、一部を文字カードで示すことで、単語のまとまりを区別して捉えることができにくい生徒は、読みとりやすさにつながる。

(2) ワークシート (抜粋)

第一次世界大戦後のアメリカ…

()年10月24日(木)→「暗黒の木曜日」
()の株式市場(ワール街)の株価が暴落し、これをきっかけに銀行や工場が()し、農作物の価格も急落し、()が町にあふれた。

各国の政策は？

各国	アメリカ	イギリス・フランス	ソ 連
政策の名称	ニューディール政策	ブロック経済	五年計画
中心人物	ルーズベルト	スターリン	
おもな内容	政府が積極的に()をおとし、生産を調整し、()を助け、労働組合を奨励した。	本国と()との関係を密接にし、それ以外の外国の商品に対する()を高くした。	独裁体制のもと、()経済により、重工業中心の工業化と農業の集団化を進行。



①
ワークシートの内容と板書の内容とを合わせたり、穴埋め式により要点をコンパクトにまとめたりすることで、学習内容の整理と理解が進み、覚えやすくなる。



②
世界恐慌という事象に対する各国それぞれの対応を、表を用いて整理し、視覚的に対比させることで対応の違いを浮き立たせることができる。また、関係情報の絞り込みや精選が図られることにより内容の理解が促進される。

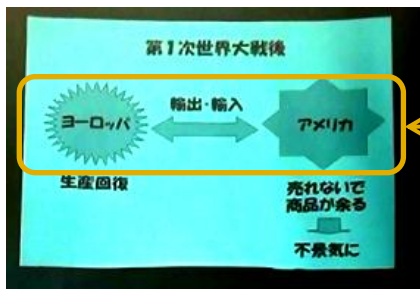
○ブロック経済に対して、ドイツ、イタリア、日本などが反発したのはなぜだろう。

③

「理解の深化」の段階でワークシートを活用する際に、生徒の実態等により、答えを導く際の手掛かりとなるリード文や末尾の文を「言葉で教える」「書いて示す」「板書やワークシートの他の部分を示しながらキーワードを言葉で教える・書いて示す」など、手立てを講じたことで、自力では回答することができない生徒が答えを導き出す際の手掛かりになる。

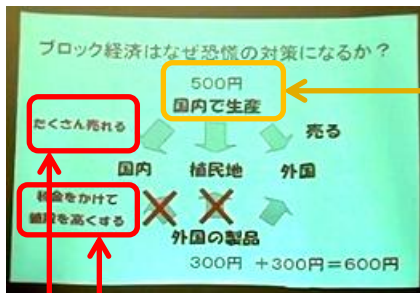
(3) 教材

◇ プレゼンテーションソフトを使って作成した教材



①

「ヨーロッパ」と「アメリカ」とを並記し、矢印で関連付けて示したことで、両国の関係や情勢を対比しての特徴を捉えやすくなったと思われる。また、「ヨーロッパ」と「アメリカ」の文字を交互に点滅させたことで、注意を向ける部分がより明確になっている。

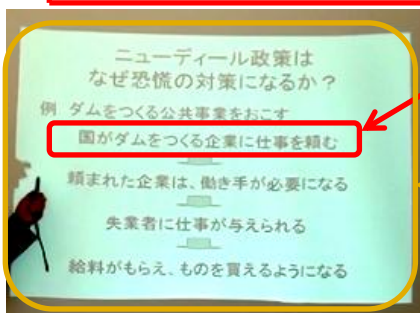


③

ブロック経済について、映像を活用して具体的な事例で説明することで、その仕組みを理解しやすくなる。

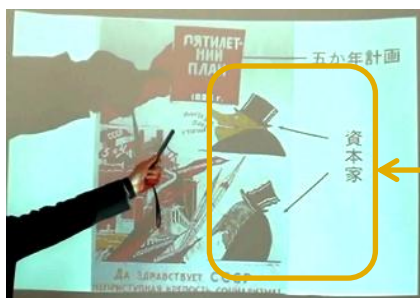
②

注目してほしいキーワードを一つ一つ順に表示することで、話し手の意図する箇所に着目しやすくなる。



④

一つの事象の結果が次の事象を引き起こす要因になっていくという状態を、段階的、視覚的にわかりやすくすることで政策がもたらす経済的影響についてのポイントが整理しやすくなる。



⑤

資本家の心情の変化を絵を用いて説明することで、政策前後の経済状況の変化が分かりやすくなる。

【事例3 数学科（対象：第2学年）】

1 単元名

「4章 平行と合同」（東京書籍：新編 新しい数学2）

2 単元の目標（ねらい）

観察、操作や実験などの活動を通して、基本的な平面図形の性質を見だし平行線の性質をもとにそれら確かめたり、図形の合同について理解し図形の見方を深めることができるようにする。

- ⑧ 平行線や角の性質に基づいて図形の性質を調べようとする。
- ⑨ 平行線や角の性質など、基本的な図形の性質を帰納的な推論や類推を用いて予想し、予想したことを考察する際、演繹的に導くことができる。
- ⑩ 平行線や角の性質に基づいて図形の性質を確かめ、説明することができる。
- ⑪ 平行線の性質や三角形の角についての性質を理解し、それをもとにして多角形の角についての性質を見いだせることを知る。

3 本時案




(1) 題材名

「多角形の内角と外角」



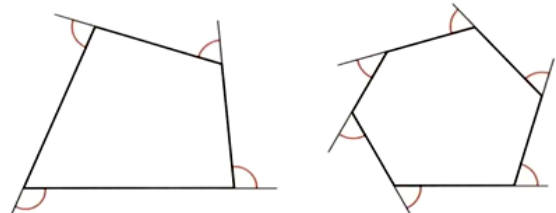

(2) 本時の目標

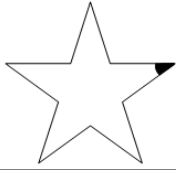
多角形の内角や外角の和の性質を理解し、それを利用して図形のいろいろな角について、その大きさを求めることができる。

(3) 学習過程

過程	学習活動	指導上の留意点	備考
教 え る	○先学習で考えてきた結果を発表する。  ①	○ <u>プレゼンテーションソフトで五角形の外角を1箇所を集めて外角の和が360°になることを確認する。</u> ここでは直観的な理解にとどめる。	○パソコン ○プロジェクター ○スクリーン
	1 本時の学習のめあてを確認し、例題を考える。  ①	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 【今日の学習のめあて】 多角形の外角の和の性質を理解し、角の大きさを求めよう。 </div>	
	 ①	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 〈例〉 五角形の外角の和を計算で求めよう。 </div>	

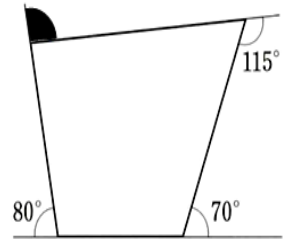
プレゼンテーションソフト（4「板書・ワークシート・教材等」参照）を用いて、外角の位置や方向を強調したり、外角を1か所を集めて360°になる様子を動画で示したりすることで、空間をイメージすることが苦手な生徒には、視覚的に外角の和の性質を理解しやすくなると思われる。

	<p>○教師の説明を聞く。</p> <p> ②</p>	<p>○「<u>内角</u>」「<u>内角の和</u>」「<u>外角</u>」「<u>外角の和</u>」について確認をする。</p> <p>○生徒と対話しながら、内角の和を求める式をもとに五角形の外角の和を求める。</p>	<p>○ワークシート No. 1</p>	<p>数学に関する用語を図を交えながら説明することで、理解語いが少ない生徒には、その意味を捉えやすくなる。</p>
	<p>2 教科書 P84 問3を確認問題として解く。</p> <p> ③</p>	<p>○他人が見て分かるように記述させる。</p> <p>○列ごとに四角形と六角形を割り当て、隣同士が同じ問題にならないようにする。</p>	<p>○ワークシート No. 1</p>	<p>計算過程を省略せずに順序立てて記述することで、解答にたどり着くまでの全体像をつかみやすい。</p>
理解の確認	<p>○座席の隣同士で伝え合うことにより理解の自己確認を行う。</p> <p>I ○全体で発表する。</p>	<p>問3 上と同じようにして、四角形、六角形の外角の和を求めなさい。</p> <div data-bbox="239 795 1069 1064" style="border: 1px solid black; padding: 5px;">  </div> <p>○二人組を作ることができない場合は教師が入る。</p> <p>○<u>数式による表現及び、言葉による表現が適切であるか留意させる。</u></p> <p>○必要に応じて教師との対話を入れながら説明させる。</p> <p>○お互いの伝え合いが終わったら解いていない方の図形について考える。(☆8)</p>	<p>○二人組</p>	<p>数式を言葉で補いながら表現させることで、数式の意味することが分かりやすくなる。</p>
	<p>3 ここまでの内容をまとめる。</p> <p> ④</p>	<p>●多角形の外角の和● 多角形の外角の和は360°である。</p>	<p>○ワークシート No. 1</p>	

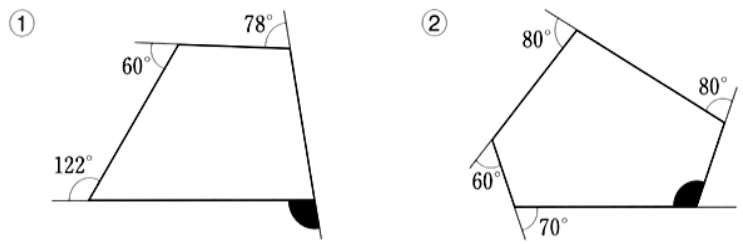
<p>教 え る II</p>	<p>4 教科書 P85 例 2 の説明を聞く。</p>		
<p>理 解 の 確 認 II</p>	<p>5 教科書 P85 たしかめ 2 を解く。</p>	<p>○②では内角を問われていることに留意させる。</p>	
<p>理 解 の 深 化 考 え さ せ る</p>	<p>6 教科書 P85 問 4 および追加問題を解き、理解を深める。</p>	<p>○ワークシート No. 2</p>	<p>問4 正多角形の外角について、次の間に答えなさい。 ① 正八角形の1つの外角の大きさを求めなさい。 ② 1つの外角が30°である正多角形は正何角形ですか。 ③ 1つの内角がその外角の3倍である正多角形は正何角形ですか。 ④ 下の星型正五角形で、色を塗ったところの角度を求めなさい。  ※ ③、④は追加問題</p>
<p>定 着 の 診 断</p>	<p>7 練習問題を解き、本時の学習で分かったことやよく分からなかったこと、感想などをワークシートに記入する。 (☆1)</p>	<p>○ワークシート No. 2、No. 3 は回収する。</p>	<p>○ワークシート No. 3</p>

例2 右の図で、色をつけた角の大きさを求めなさい。

<解答> 多角形の外角の和は360°であるから、
 色をつけた角の大きさは
 $360^\circ - (80^\circ + 70^\circ + 115^\circ)$
 $= 360^\circ - 265^\circ$
 $= 95^\circ$ 答 95°



たしかめ2 下の図で、色をつけた角の大きさを求めなさい。



※ ③、④は追加問題

4 板書・ワークシート・教材等

(1) 板書



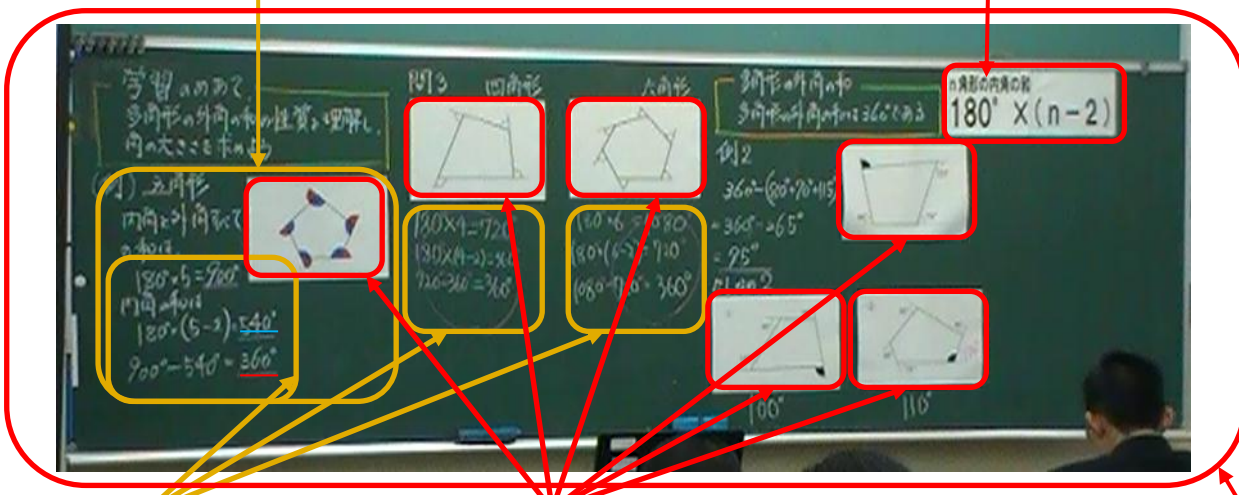
①

計算過程の各段階と対応する図形の部分に、同じ色で線を引いたり色を付けたりすることで、位置や量感をつかむことが苦手な生徒や、計算式と図を関連付けることが苦手な生徒には、視覚的に関係性がつかみやすくなる。



②

既習事項（公式）を黒板に掲示することは、既習内容を思い出せない生徒や教科書・ノートから探し出すことが難しい生徒には効果的である。



①、③

計算過程を省略・変更せずに記述させることで、解答を導き出すまでの過程が分かりやすくなる。



②、③

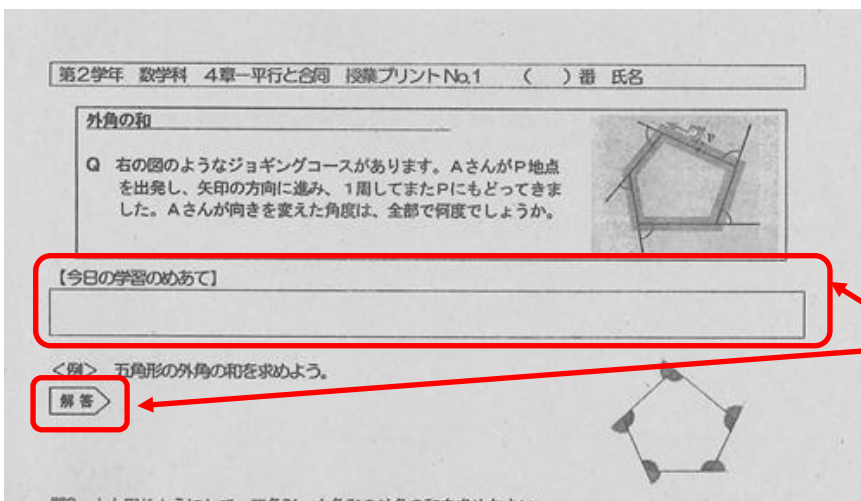
公式や図形を画用紙等で示したり、枠で囲んだりすることで、黒板の文字と区別することができ、見やすくなる。



④

「学習のめあて」→「例」→「問い」→「本時のポイント」というように板書を構造化することで、授業の流れが分かりやすくなる。

(2) ワークシート

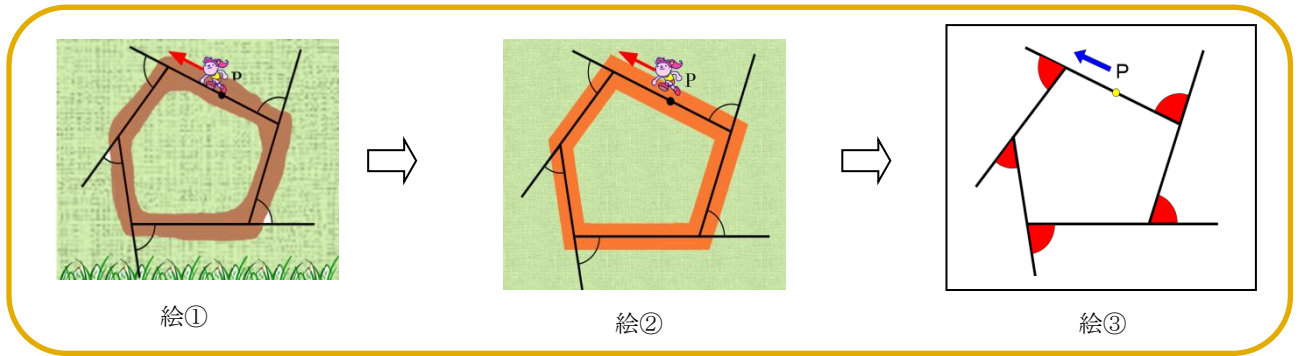


①

枠を設けたり書き始めの位置を示したりすることで、どの部分に、どれくらいの大きさの文字で書けばよいか迷う生徒には、書きやすくなる。

(3) 教材

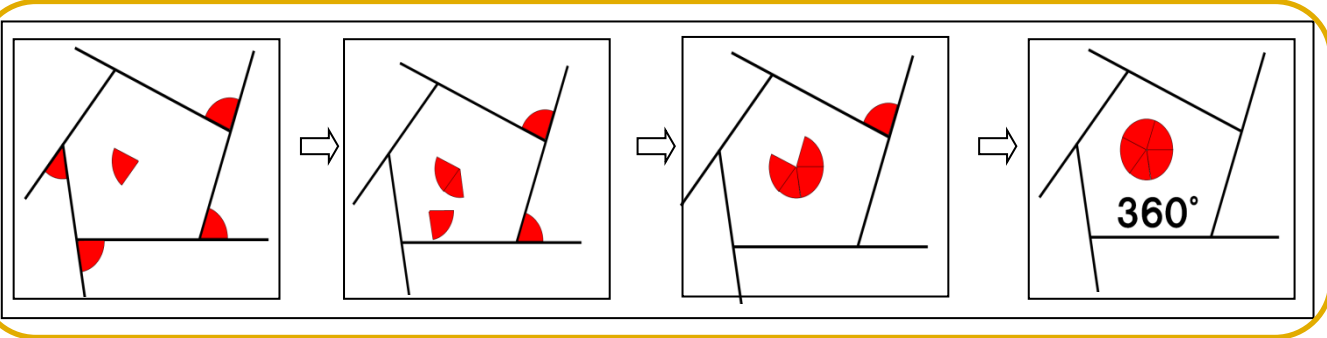
◇ プレゼンテーションソフトを使って作成した教材①



①

教科書の（絵①）から五角形の外角の和（絵③）がすぐにイメージできない生徒には、それらに絵②を加え、「絵①→絵②→絵③」の順序で徐々に変換しながら見せることで、多角形の外角の和の特徴が理解しやすくなる。

◇ プレゼンテーションソフトを使って作成した教材②



①

プレゼンテーションソフトを用いて、外角の位置や方向（右図参照）を強調したり、外角を1か所に集めて360°になる様子を動画で示したりすることで、空間をイメージすることが苦手な生徒には、外角の和の性質の理解につながる。



【事例4 理科（対象：第1学年）】

1 単元名

「身近な物理現象～ものが水に浮くわけ～」(啓林館：未来へひろがるサイエンス)

2 単元の目標（ねらい）

身近な事物・現象についての観察、実験を通して、光や音の規則性、力の性質について理解させるとともに、これらの事物・現象を日常生活や社会と関連付けて科学的にみる見方や考え方を養う。

3 本時案

(1) 本時の目標




○物体が水中にあるとき、浮力によりばねばかりの示す値は空気中よりも小さくなることを理解することができる。

(自然事象についての知識・理解)

○浮力は物体が水から上向きの力を受けるため発生することを見いだすことができる。



(科学的な思考・表現)

(2) 学習過程

過程	学習活動	指導上の留意点	備考
教える	1 浮力の予習内容の確認を行う。 予習内容の確認を通して、基本的な内容の理解をする ・「 <u>物体が水中にあるときにばねばかりの示す値は、空気中にあるときよりも小さい。これは、物体が水から上向きの力を受けるからである。この力を浮力という。</u> 」  ①  ①	○予習内容の確認を行い内容の理解を調べる。 ・事前に予習で書いてきたことを3つの文に分けることを指示する。 ・予習でわからなかったことを教師が把握するために、3つの文に分けて人数を把握する。 (☆3)	一斉学習 予習の理解を確認する
	2 [理解確認を図る] 水が物体を浮かす力を調べる実験を行う。 ・実験方法の確認を行う。  ① 実験から物体は水から上向きの力を受けていることを確認する ・水が物体を浮かす力を調べる実験において、空気中と水中のばねばかりの示す値の差か	○ <u>実験の説明・理解確認(演示実験)</u> ・ <u>全員で実験方法を指でさしながら読む。</u> ・実験を通して予習内容の確認を項目ごとに行う。 1) 空気中での値(重さ)を測定	演示実験 確認理解 <u>実物投影機</u>

手順の理解、安全面の指導の徹底の視点から、指さしをしながら読ませることで、聞き逃し等がある生徒には、理解しやすくなると思われる。

実物投影機を活用して注目すべき点を拡大して見せることで、注意が外れやすい生徒にとっても、自分の座席から注目しやすくなる。

	<p>ら水中では浮力が働き、物体は水から上向きの力を受けることを確認する。</p>  ②  ②	<p>させる。</p> <p>2) 水中での値（重さ）を測定させる。</p> <p>3) 「空気中」「水中」での値（重さ）を確認して、上向きの力が発生していることを説明する。</p> <p>4) 空気中と水中とでの重さの差が浮力であることを説明し、実際に計算させる。</p> <p>5) <u>浮力の説明を行う。</u></p> <p>○<u>予習内容を実験結果の値に置き換えグループのメンバーに説明させて確認を行う。</u></p>	<p>理解の共通化 グループ</p>															
<p>考えさせる 理解の深化</p>	<p>3 [理解深化問題に取り組ませる] 浮力の大きさは何と関係があるのか考える。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> 浮力の大きさは、何と関係しているのでしょうか？ </div> <p>・重さと体積の条件制御実験を行う。</p> <table border="1" data-bbox="225 1128 587 1234"> <thead> <tr> <th>条件</th> <th>変える条件</th> <th>変えない条件</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td> <td>重さ</td> <td>水中部分の体積</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>水中部分の体積</td> <td>重さ</td> </tr> </tbody> </table> <p>4 実験の予想を行う。</p> <p>浮力の大きさと関係する条件が重さか体積なのかの生徒の予想</p> <table border="1" data-bbox="225 1570 587 1832"> <thead> <tr> <th>予想</th> <th>理由</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>重さ</td> <td>重さと上向きの力は、比例する。船など大きなものは水に浮くので重さ大きいほど浮力が大きくなる。</td> </tr> <tr> <td>体積</td> <td>重さとは関係していない。水中部分の体積が増えるほど浮力が大きくなる。</td> </tr> </tbody> </table>	条件	変える条件	変えない条件	1	重さ	水中部分の体積	2	水中部分の体積	重さ	予想	理由	重さ	重さと上向きの力は、比例する。船など大きなものは水に浮くので重さ大きいほど浮力が大きくなる。	体積	重さとは関係していない。水中部分の体積が増えるほど浮力が大きくなる。	<p>○<u>浮力と関係することは、「重さ」なのか「体積」なのか条件を変えた実験を行う。</u></p> <p>○<u>条件を制御した実験を行う場合に、変える条件と変えない条件を明確にする。</u></p> <p>・重さ…フィルムケースの中のおもりの重さ</p> <p>・体積…フィルムケースの水中部分の体積</p> <p>・<u>個人で予想させ人数を調べる。</u></p>	<p>ワークシート</p> <p>条件制御による実験</p> <p>個</p>
条件	変える条件	変えない条件																
1	重さ	水中部分の体積																
2	水中部分の体積	重さ																
予想	理由																	
重さ	重さと上向きの力は、比例する。船など大きなものは水に浮くので重さ大きいほど浮力が大きくなる。																	
体積	重さとは関係していない。水中部分の体積が増えるほど浮力が大きくなる。																	

お互いに説明しあうことで、言葉で話すことが苦手な生徒は、友達の説明を聞くことが、説明の仕方や要点の理解につながり、自分の言葉で説明しやすくなる。

浮力に関係することが「重さ」なのか「体積」なのか、条件を変える実験を行うことで、理解しやすくなる。さらに、操作等を伴うことで記憶にも残りやすくなる。

実験の「変える条件」と「変えない条件」を対比して表にしてまとめることで、視覚的に捉えやすくなる。

実験の結果を予想させることで、本時のねらいに対する意識や実験に対する興味関心が高まり、実験の結果についても記憶に残りやすくなる。

4 板書・ワークシート・教材等

3章 力による不思議な現象
ものが水に浮くわけ

1年()組()番 氏名

○ 理解を深めよう。
【実験】浮力の大きさは何と関係しているのでしょうか？フィルムケースの中のおもりの重さでしょうか？フィルムケースの水中部分の体積でしょうか？

予想
フィルムケースの中のおもりの重さ、フィルムケースの水中部分の体積

準備するもの
ばねばかり、フィルムケース（おもりが2個、3個のもの）、水そう、ぞうきん

条件1【重さ】フィルムケースはすべて水に沈める

変える条件	変えない条件
重さ	水中部分の体積

結果1

おもりの個数	空気中
2	
示す値 [N]	3

条件2【体積】おもりが3個のフィルムケース

変える条件	変えない条件
水中部分の体積	

結果2

水中部分の体積	空気中
半分	
示す値 [N]	全部

実験結果から分かること
条件1の結果から、
条件2の結果から、
以上のことから浮力の大きさは、

①
書くことが苦手な生徒には、ワークシートと同じ拡大用紙を黒板に貼って示すことで、説明を聞き逃すことが減る。

①
実験の手順及び器具の安全な操作方法について、文章だけでなく、絵や図で簡潔に示すことで、読んで理解することが苦手な生徒は、具体的にイメージしやすくなる。ルールや手順の理解にもつながる。

②
「空気中と水中の差」の文章が表す計算式を示すことで、どのような計算式を立てて計算すればよいのか、理解が難しい生徒は、理解しやすくなる。

示す値を読み取る。

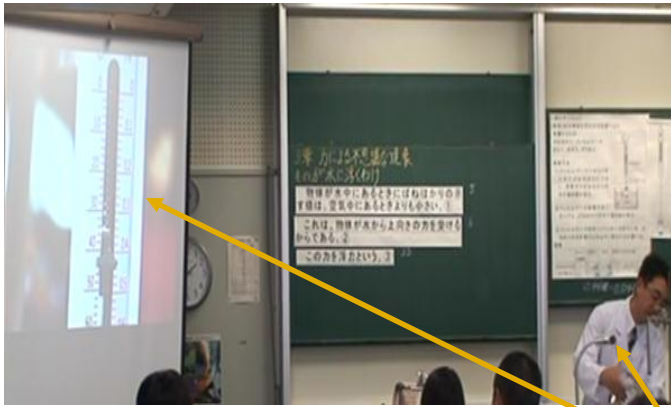
②フィルムケース全部が水に沈んだら、ばねばかりの示す値を読み取る。

③フィルムケースをゆっくりと水に沈めていき、ばねばかりの示す値がどのように変化するか調べる。

結果

の個数	示す値 [N]
1	0.44(0.04)
	0.44(N) - 0.04(N)

①
実験前に力を表す単位について、N（ニュートン）とg（グラム）のどちらかを読むのかを映像とともに確認することで、既習事項を覚えておくことが苦手な生徒は考えやすい。また、1目盛りの単位（0.02ニュートン）を再度、映像で確認させることで、どちらの単位を用いればよいか理解しやすくなる。また、ばねばかりが示す値について、実物を拡大したものを、具体的に指示棒等でポイントングすることで、どこに注目すればよいか分かりやすくなる。



②

実際に水に重りを沈めながら、ばねばかりの値がどのように変化しているのかを映像で示すことで、言葉や資料だけで事象を想像することが難しい生徒にとって分かりやすい。また、予習の内容「物体が水中にあるときに、ばねばかりが示す値は、空気中にあるときよりも小さい。これは、物体が水から上向きの力を受けているからである。この力を浮力という」について、この文章が示す意味を映像と関連付けることで理解しやすくなる。

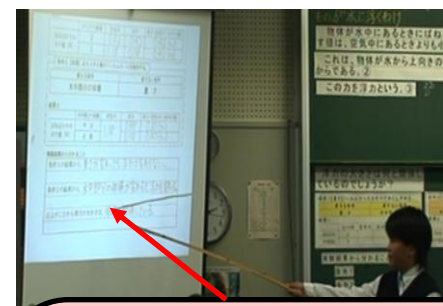
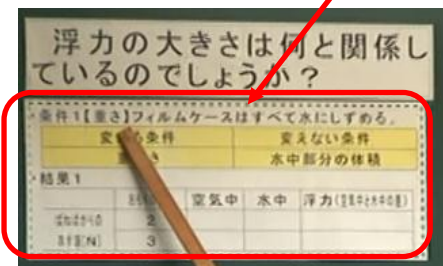
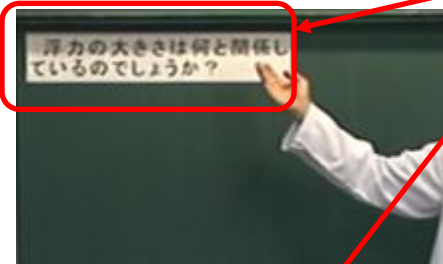


③



②

板書とワークシートとを対応させ、部分的に示し、指示棒等でポインティングすることで、どこに注目すればよいか分からない生徒は、分かりやすくなる。



③



③

「実験から分かること」の発表では、口頭発表とともに、ワークシートに記入した文字を拡大し、指示棒等で示しながら発表者に説明させることで、聞き逃しが多い生徒や、聞き取りに課題のある生徒は、理解しやすくなる。

1年()組()番 氏名 _____

○ 理解を深めよう。

【実験】浮力の大きさは何と関係しているのでしょうか？フィルムケースのおもりの重さでしょうか？フィルムケースの水中部分の体積でしょうか？

・予想

フィルムケースの中のおもりの重さ、フィルムケースの水中部分の体積。

・準備するもの

ばねばかり、フィルムケース（おもりが2個・3個のもの）、水そう、ろうまん。

条件1【重さ】フィルムケースはすべて水にしずめる。

変える条件	変えない条件
重さ	水中部分の体積

結果1

おもりの個数	空気中	水中	浮力(空気中と水中の差)
2			
3			

ばねばかりの示す値(N)

半分	全部

実験結果から分かること

条件1の結果から、

条件2の結果から、

以上のことから浮力の大きさは、



【事例5 外国語科<英語> (対象：第1学年)】

1 単元名

「Lesson 5 My friends in Okinawa」 (三省堂：NEW CROWN ENGLISH SERIES New Edition 1)

2 単元の目標 (ねらい)

- 本文やスキットを暗唱し、音声の特徴を生かし、内容が良く表現されるように発表しようとする。
- 3人称の代名詞主格や目的格の用法を理解し、身のまわりの人を紹介したり、その人について尋ね合ったりすることができる。

3 本時案

(1) 本時の目標

3人称の代名詞主格(he、she)の用法を理解し、有名人についての紹介文を書くことができる。

(2) 学習過程

過程	学習活動	指導上の留意点	備考
始 業 前	 ① ②	○本時の学習に必要な内容をあらかじめ板書しておく	
導 入	1 簡単な読み書きのトレーニングを行う。  ①  ③	○ペアで活動させる。各ペアの活動の様子を把握し、適宜アドバイスをを行う(☆8)。 ○重要なアクセント・発音に気を付けながら、リズムよく練習させる。	○ワークシート
展 開	2 教師のスピーチを聞く。  ④	○自分自身の家族のことを話題としたスピーチを行う。 ○表情豊かに、生徒の反応を見ながら行う。	○写真
	3 第三者を紹介するときの用法を知り、練習する。	○教師のスピーチを振り返りながら、3人称の代名詞主格の用法を知らせる。	

単語は「音(読み)ー形(文字)ー意味」を関連させて発音したり書いたりすると、記憶(理解)しやすくなる。



教師がスピーチしたことで、「音」を聞き取ることが苦手な生徒も聞き取りやすいと思われる。

【参考】

CD等の機械音は、「聞く」ことが苦手な生徒の場合、聞き取りにくいことがあるため配慮が必要。

表情やボディアクションを付けることで、スピーチの内容を推測しやすくなり、内容理解につながる。

「he」「she」の音を繰り返し聞き取り、生徒自身が発音したりすることで、「聞く」ことが苦手な生徒は、音の違いに気付きやすくなる。

展 開	<p>4 紹介文を聞いて、誰なのかを推測する。</p> <p>5 ある有名人についての紹介文を書く。</p>  ①  ②	<p>○絵や写真を見せながら、<u>繰り返し口頭練習させる。</u></p> <p>○隣の人について、3文で紹介させる (☆8)。</p> <p>○個人で言えるかどうかを確認しながら進めていく。</p> <p>○クイズにより表現に慣れさせる。<u>聞き取りクイズを4問行い、内容を徐々にレベルアップしていく</u> (☆3)。</p> <p>○6人の有名人の写真を提示し、紹介する人物を1人選択させる。<u>紹介文を書くことにより、3人称の代名詞主格について理解を深めさせる。</u></p> <p>○紹介文の例を示し、<u>参考にする</u> (☆3)。</p> <p>○全体に発表する場面があることを予告することで、表現意欲を高める (☆3)。</p> <p>○活動が停滞している生徒については、板書事項①②の英文を参考にさせる。適宜、個別に支援する。</p> <p>○<u>read and look up</u>を意識して発表させる。</p> <p>○ペアに紹介した後、数名を学級全体に発表させる。</p> <p>○発表後、発表者の表現で良かった点や改善点を伝える (☆1)。</p>	<p>○電子黒板</p> <p>○ワークシート</p> <p>○電子黒板</p> <p>○電子黒板</p>
	<p>7 本時の学習を振り返る。</p>	<p>○本時のポイントを確認するとともに、生徒の定着度を把握する。</p> <p>○自己評価表に、本時の活動の振り返りや疑問点を記入させることで、次の活動への意欲を喚起する (☆1)。</p>	

英文を繰り返し聞いたり、生徒自身が話したりすることで、「聞く」ことが苦手な生徒は、英語と日本語の音の違いや語と語の連結による音の変化に気付きやすくなると思われる。

ここでの活動は「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4技能を総合的に取り入れているが、「聞きながら書く」のように二つの技能を同時に行うのではなく、「聞く」「書く」のように一つ一つの活動に集中できるようになっている。これは、同時に複数の情報を処理することが苦手な生徒にとって取り組みやすい。

4 板書・ワークシート・教材等

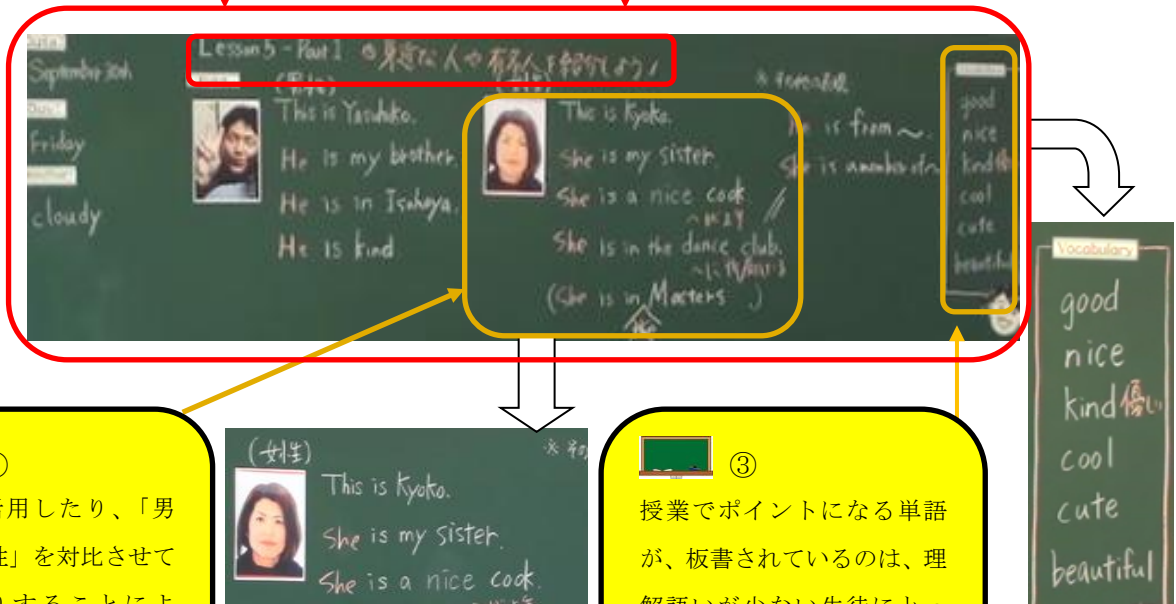
(1) 板書

①

板書が、左から「今日の情報（日付等）」「課題解決の手助けとなる視覚資料及び例文」「本時のポイントとなる単語」というように構造化されており、授業の流れや必要な情報が分かりやすい。

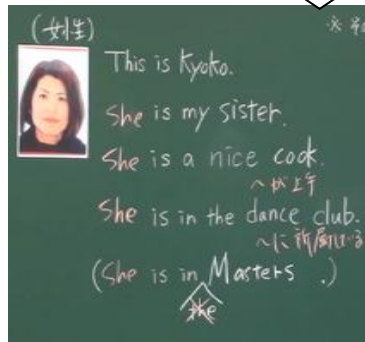
②

本時の単元、課題（point）が示してあることで、この時間に何を学習するのが分かりやすい。



④

写真を活用したり、「男性」「女性」を対比させて示したりすることにより、3人称代名詞主格の理解が促される。



③

授業でポイントになる単語が、板書されているのは、理解語いが少ない生徒にとって有効であると思われる。（導入の単語学習でも取り入れている。「(3)のワークシート」参照。）

(2) 電子黒板



①

紹介文を例示する際に、英文と映像とを提示することにより、英語への苦手意識が強い生徒や英文を聞いてイメージすることが苦手な生徒にとっては、理解しやすくなる。

(3) ワークシート

◇ ワークシート①

English BEST

○できるだけ速く、正確に書き写しましょう。

() 番まで書き写した。

①	Mr. ~さん (男性)	Mr. Brown ブラウンさん	
②	Ms. ~先生 (女性)	Ms. Kato 加藤先生	
③	singer 歌う人	good singer 上手な人	

①
毎回、自分なりの目標で取り組むことができるため、「書く」ことへの苦手意識が強い生徒も取り組みやすい。

③ ①
授業でポイントになる単語が、導入の単語学習の中に取り入れてあることは、理解語いが少ない生徒にとって有効である。

①
単語を書くスペースに罫線があることで、「書く」ことに困難がある生徒は書きやすい。
[参考]
「書く」ことが苦手な生徒の場合、罫線がある方が文字の形は整いやすい。文字の形が整ってきたら、罫線を一度に無くすのではなく、一番上の罫を無くす→一番下の罫を無くす→基準線だけを残すというように段階を踏んで、減らしていくようにする。

◇ ワークシート②

有名人を紹介しよう!

①6人の有名人の中から1人選んで紹介文を作成しよう。下の例文や、板書・BESTなどを参考にしながら5文以上書きましょう。

例) Look at this picture.
This is Nagatomo Yuto.
He is a good soccer player.
He is from Ehime.
He is in Italy.
He is a member of Inter FC.
He is cool. インテル
Do you like soccer?

後で、ここに写真を貼ろう!

②紹介文が完成した人は、裏に進んで、2人目の紹介にチャレンジしよう!

②
何をどれだけすればよいのかを明確に示していることにより、指示を聞き取れなかったり、理解できなかったり、忘れてしまったりした生徒に有効である。

②
学習のヒントとなる例文が電子黒板だけでなく、ワークシートにも示されていることにより、「読む」「書く」ことに困難がある生徒には、有効である。

②
終了したら何をすればよいのかを明確に示しているため、状況判断をすることが苦手な生徒に有効である。

VIII まとめ

1 研究1年次の成果

(1) 「分かりやすい授業」の要件

各事例を特別支援教育の視点から分析を行うとともに、先行研究を調査した結果、事例に挙げた各教科において「分かりやすい授業」づくりにつながる特徴的な要件（表1参照）と、その他の教科を含む全ての教科に共通した要件（表2参照）が明らかになった。

なお、全ての教科に共通した要件については、5つの事例で行われた支援や工夫を、国立特別支援教育総合研究所重点推進研究「小・中学校等における発達障害のある子どもへの教科教育等の支援に関する研究」研究成果報告書（2010）の「学級全体への支援の工夫」及び「支援のリスト一覧表」に示された項目と照合した後、5つの事例全てに共通したものを整理した。

表1：各教科における特徴的な「分かりやすい授業」の要件

国語科	・抽象的な言葉や表現について、身近な事象や具体物等を示しながらイメージを持たせる。
	・教師のモデルや友達の意見に触れさせながら、新たなものの見方・考え方・とらえ方を経験させる。
	・文章の構造や構成要素に着目させ、生徒自身が表現するときのヒントや工夫に繋げる。
社会科	・写真やグラフ、地図等の情報を関連付けて、事象に関する時代背景や要因、事象が及ぼした影響等のイメージを持たせる。
	・事象を項目に沿って表にまとめて比較することで、本時のねらいや注目すべきポイントに気付かせる。
数学科	・数学に関する用語や公式、図形やグラフ等の意味や性質について、視覚的な情報や具体的な操作によってイメージを持たせる。
	・計算過程全体を可視化し、見通しを持って計算が実行できるようにする。
理科	・演示実験に注目しやすい工夫や環境設定を行うことで、実験の目的やねらいを明確にするとともに、手順や方法等を確認させる。
	・実験の目的を明示したり、結果を予想させたりすることで、実験に対する意欲や目的意識を持たせる。
	・条件を制御した実験の際、「変える条件」と「変えない条件」を明確にし、実験の目的やねらいを焦点化する。
外国語科(英語)	・単語を「音(読み)－形(文字)－意味」を関連させながら発音したり書いたりさせる。
	・表情やボディアクションを付けることで、スピーチの内容を推測させたり、内容を理解するうえでのヒントにさせる。
	・英文を繰り返し聞いたり、生徒自身が話したりすることで、音の違いや語と語の連結による音の変化に気付かせる。
	・「読む」「書く」「聞く」などの一つ一つの活動に集中できるような授業構成を行う。

表2：全教科に共通する「分かりやすい授業」の要件

<p>★1 目標、ねらい 学習の評価</p>	・毎時間行うドリル学習や課題テストで、自分なりの目標を持たせる。
	・間違った回答に対しても、発表したこと自体を認めることで次の学習への意欲につなげる。
	・発表後、発表者の表現で良かった点や改善点を伝える。
	・机間指導の際に評価できる点を見つける。よい発言や態度などをさりげなくすぐ褒める。
	・適切な行動は即時に評価する。
	・適切な行動は全員の前で賞賛し、何が良かったか伝える。
	・どんな小さなことでも良かったことは学級全体へ返す。
	・自己評価表による本時の振り返りを行い、次時への意欲を喚起する。
<p>★2 学習の準備</p>	・授業の始めに、机上に必要なものだけが出ているか確認する。
	・具体物一つずつ見せながら、同じものを準備させる。
	・机上の整理をさせてから、必要なものを準備させる。
<p>★3 授業の構成</p>	・導入時に注意を引き付けるような視覚的な提示やゲームなどをする。
	・授業の始めに、予習で分からなかったことを把握する。また、授業の最後には理解できたか確認する。
	・授業の始めに学習内容(ねらい)について伝え、板書する。
	・今日の課題や作業の進め方を板書で示す。
	・授業の中に様々な活動を取り入れる。
	・授業の基本的な流れを定め、学習の展開を分かりやすくする。
	・どこまで取り組むのか、「終わり」をしっかりと知らせる。
	・あと何題、あと何分などゴールを伝える。

<p>★3 授業の構成</p>	・授業の途中で、何度か課題の達成状況を確認する。
	・課題設定を易しいものから難しいものへレベルアップさせ、学習意欲を高める。
	・発展的な課題を準備し、一人一人に応じてチャレンジさせる機会を設ける。
	・時間通りに授業を始め、終わらせる。
<p>★4 指示の出し方</p>	・作業や活動を止めさせてから指示をする。
	・始めからワークシートを配らないで、板書や教師の説明に集中させる。
	・指示は肯定的な表現で行う。
	・全体指示の後、丁寧に机間指導をして理解の程度や取組の状況を把握する。
	・ジェスチャーをつけながら指示を出す。
	・言葉の指示だけでなく視覚的な手掛かりも与える。
	・実際にやって見せて説明する。
	・授業のまとめでは、ワークシートを使って整理する。
・指示の語調、声の大きさ、トーン等を工夫しながら話す。	
<p>★5 教材教具</p>	・見て(視覚)→読んで(聴覚)→書く(動作)等の様々な感覚を用いて情報を理解させる。
	・多様なレベル・パターンの課題を準備し、子ども自身が進捗に合わせて取り組めるようにする。
	・プレゼンテーションソフトで作った教材やICT等の視聴覚機器を利用する。
<p>★6 板書の工夫 ノート指導</p>	・ワークシートと対応させた板書を行う。
	・文字の大きさに配慮し、後ろからでも見やすい大きさと書く。
	・文字カードは重要なキーワードにのみ使用する。

<p>★6 板書の工夫 ノート指導</p>	・教科書のページを板書する。
	・ワークシートを拡大した用紙を黒板に貼って説明する。
	・注目してほしいキーワードや重要語句を強調する(文字の大きさ、色、アンダーライン等)。
	・授業の流れが分かるように構造化された板書をする。
<p>★7 学習環境</p>	・学習のヒントや既習事項を、補助黒板やワークシートなど様々なところに示す。
	・ワークシートに記述した内容を発表する際、ワークシートを拡大投影する。
<p>★8 学習形態 (ペア、グループ)</p>	・発表をペアでさせるように配慮し、教え合えるような場面を工夫をする。
	・全体に発表する前に、ペアで練習する機会を設けて、自信や意欲を持たせる。
	・「個人ワーク→斉→グループワーク→個人ワーク」というように、学習形態を組み合わせる。
	・自力解決した結果をペアで確認させたり、友達へのアドバイスや助言を伝えさせたりして、自己の取組や活動を振り返らせる。

(2) 次年度の研究に向けて

◆ 「分かりやすい授業」の要件を取り入れた授業の効果について検証する

教科の特性を踏まえた工夫や手立て等について、特別支援教育の視点から分析・意味付けを行うことで、支援を必要とする生徒を含む全ての生徒に「分かりやすい授業」の要件を明らかにすることができた。

次年度はこれらの要件を組み入れた授業実践を県内の中学校の協力を得ながら、仮説検証授業という形で実施し、その有効性や妥当性について明らかにするとともに、「分かりやすい授業」の定義についても再考し、「分かりやすい授業」の要件を更に充実させたい。

◆ 研究対象とする教科等の拡充を検討する

本研究により、「分かりやすい授業」の要件については、まず、各教科ごとに特徴的な要件があることが明らかになった。このことは、今回、事例として取り上げた教科以外においても、「分かりやすい授業」の要件が同じように存在しうることを示唆するものである。あらゆる学習において全ての生徒に「分かる・できる」という実感を持たせるためには、中学校における全ての教科・領域に関する要件等が明らかにされることが望まれる。

さらにそれは、「分かりやすい授業」のもう一つの要件である「全教科に共通する要件」の有効性、妥当性を検証することにおいても、研究対象とする教科を拡充することは必要であろう。

◆ 「分かりやすい授業」における「個別の配慮」の位置付けを明らかにする

本研究で考える「分かりやすい授業」づくりは、全ての生徒の「分かる・できる」を実感につなげるものであることは間違いない。しかし、認知特性や理解の仕方等、生徒の実態が多様である中で、全ての生徒に一様に理解を促すことは難しく、「分かりやすい授業」には「限界」があることもまた事実である。「分かりやすい授業」が効果的に実施されたとしても、ある生徒にとって、教師が期待していた学びが保障されなければ、やはりそこには、特別支援教育の知見を基にした個別の配慮と支援も考慮した授業に発展・拡充していく必要がある。

全ての生徒に「分かった」「できた」という実感を持たせるためには、「個」に特化した支援と配慮が「分かりやすい授業」の中に設けられることが望まれる。しかし、それは、授業のねらいや目標から逸脱せず、整合性を保った適切かつ無理のない支援・配慮であるかが十分吟味されていないならば、「分かりやすい授業」は一過性のものとして終わるであろう。このことを踏まえて、次年度は「分かりやすい授業」づくりの新たなステージに向けた提案を行う必要がある。

◆ 各課との協働的・横断的研究の継続

本年度は、義務教育研修課及び企画課の教科担当指導主事及び研修員と協働し、事例として挙げた5教科「国語科」「社会科」「数学科」「理科」「外国語科（英語）」について授業研究会を実施した。各教科それぞれの知見や研究実績等が融合・活用され、所期の目的を十分達成することができた。

次年度も各課との協働・横断的研究を継続するために、本年度の成果と課題、次年度の方向性について共通理解を図っていきたい。

終わりに

特別支援教育の視点を生かす授業づくりは、決して新しい考え方を取り入れたり、特別な配慮を行ったりすることではなく、これまで培ってきた教科指導のノウハウの中にも多く含まれていることである。つまり、「分かりやすい授業」のスタートラインは、児童生徒を入念に理解した上で、これまでの教科指導を改めて見つめ直すことであり、そのことを多くの先生方に実感してもらえることを願っている。

資料・参考文献等

- 廣瀬由美子・桂聖・坪田耕三（2009）：通常の学級担任がつくる授業のユニバーサルデザインー国語・算数 授業に特別支援教育の視点を取り入れた「わかる授業づくり」ー。東洋館出版社
- 桂聖・廣瀬由美子編著（2010）：授業のユニバーサルデザイン Vol. 1. 東洋館出版社
- 桂聖・廣瀬由美子編著（2010）：授業のユニバーサルデザイン Vol. 2. 東洋館出版社
- 桂聖・廣瀬由美子編著（2011）：授業のユニバーサルデザイン Vol. 3. 東洋館出版社
- 桂聖・廣瀬由美子編著（2012）：授業のユニバーサルデザイン Vol. 4. 東洋館出版社
- 桂聖・廣瀬由美子編著（2012）：授業のユニバーサルデザイン Vol. 5. 東洋館出版社
- 桂聖・廣瀬由美子編著（2012）：授業のユニバーサルデザイン 国語授業の全時間指導ガイド1年。東洋館出版社
- 廣瀬由美子・桂聖他（2012）：LD研究 第21巻第1号 学会大会企画シンポジウム2 『授業のユニバーサルデザイン化への挑戦』. p. 44-55
- 国立特別支援教育総合研究所（2010）：小・中学校等における発達障害のある子どもへの教科教育等の支援に関する研究
- 埼玉県立総合教育センター（2012）：平成23年度調査研究報告書 小中高等学校におけるユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業実践に関する調査研究（中間報告）
- 長崎県教育センター（2008）：通常学級の特別な教育的支援を必要とする児童生徒が生き生きと活動できる学級経営・指導の在り方
- 長崎県教育センター（2009）：すぐに使える校内ヒント集
- 長崎県教育センター（2010）：高等学校における特別支援教育ハンドブック基礎編
- 長崎県教育センター（2012）：高等学校における特別支援教育ハンドブック実践編
- 廣瀬由美子・桂聖・坪田耕三（2009）：通常の学級担任がつくる授業のユニバーサルデザインー国語・算数 授業に特別支援教育の視点を取り入れた「わかる授業づくり」ー。東洋館出版社